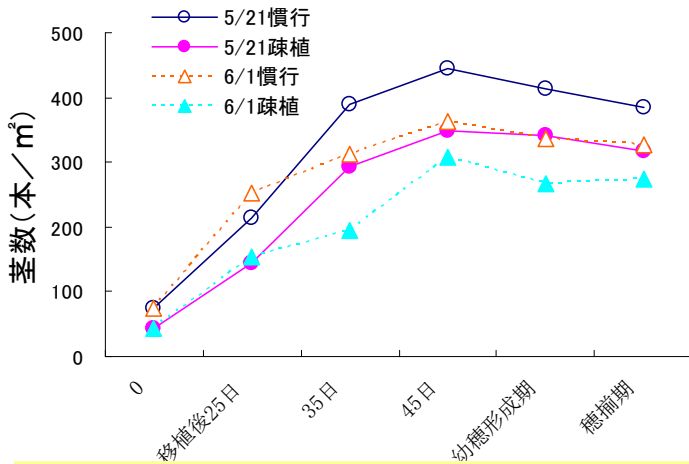


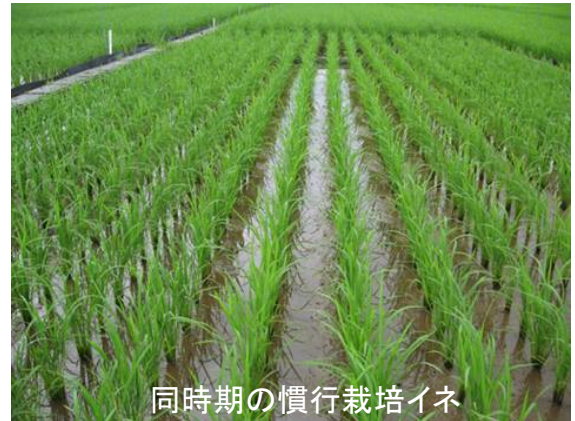
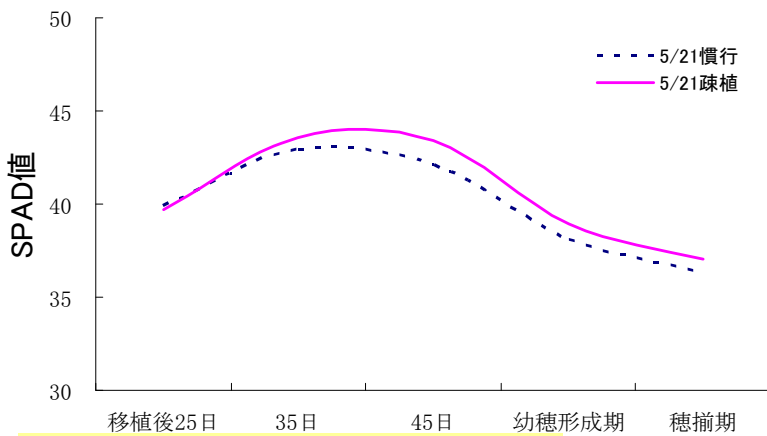
30cm角植えてプチ低コスト化

疎植したコシヒカリの栽培特性と疎植の経済性

慣行栽培(60株/坪)に比べ疎植(36株/坪)にすると...



① 茎数・穂数が慣行より2割程度少ない



② 葉色が濃く推移する

③ 一穂が大きくなり、千粒重も増加する

④ 玄米の窒素含有率が增加する

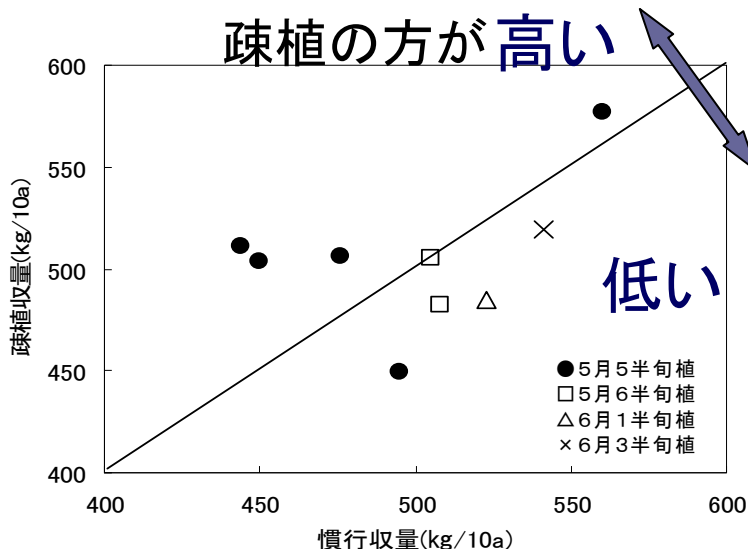
収量構成

	穂数 (本/m²)	1穂 粒数	穎花数 (百/m²)	登熟 歩合 (%)	千粒重 (g)	等級	倒伏 程度 (0~4)	玄米中 窒素 含有率 (%)
疎植	299	99.8	297	77.0	23.0	4.9	2.0	1.39
慣行	345	84.7	290	76.2	22.6	5.1	2.2	1.34
t検定	**	**			*			*

注1)データ収集年度は図3と同様、窒素含有率のみ2007

2)*、**はそれぞれ5%、1%で有意

⑤ 収量は、5月移植では慣行と同程度、6月移植では減収の傾向



・5月植では疎植がやや高い
 ・5月末以降の田植では疎植の方が低い傾向
 (6月植では屑米が増加)

育苗にかかる経費の節減効果

(単位:箱・円・kg/10a)

疎植での使用 苗箱数	苗に掛かる 直接費	直接費の差額(疎植－慣行)			同左収量 換算値 (対18箱の場合)
		対14箱	対16箱	対18箱	
8	3,515	-2,636	-3,515	-4,394	-17.7
9	3,955	-2,197	-3,076	-3,955	-15.9
10	4,394	-1,758	-2,636	-3,515	-14.1

反当16箱使う人が9箱にすれば3,000円のメリット(手間は計算に入らず)

注1) 収量換算値は、直接費の差額を米販売単価(円/kg)で除して算出した。
 2) 米販売単価はH17年産コシヒカリ1～3等の平均とした。

技術導入に当たって

- ① 本情報の内容は県内平坦部以外では未検討である。
- ② 箱施用剤の施用に当たっては、箱当たり施用量を遵守するとともに、単位面積あたりの苗箱が少なくなるため本田への箱施用剤投下量も減少するため、病虫害の発生状況により本田防除が必要な場合もある。
- ③ 6月中旬移植では徒長傾向かつ葉色も濃く推移するため病虫害や倒伏等被害が発生しやすくなるため疎植としない方が望ましい。

問い合わせ先 : 鳥取県農林総合研究所農業試験場 作物研究室
 電話 : 0857-53-0721

※ 本書から転載複製する場合には必ず上記に許可を受けて下さい。